

*It is that*節構文と「の(だ)」構文*

加藤 雅 啓**

(平成23年9月29日受付;平成23年11月8日受理)

要 旨

本稿は、*It is that*節構文を巡る議論、とくに大竹(2009)で展開されている日本語の「の(だ)」構文との比較対象研究を概観したうえで、*It is that*節構文と「の(だ)」構文の関連性について、実証的に検討するものである。

KEY WORDS

*It is that*節構文 「の(だ)」構文 既獲得情報 新獲得情報 知覚領域 認識領域 語用論

1. That's all right.とIt's all right.

That's all right.とIt's all right.は、謝罪や感謝の言葉を述べた相手に返す表現としてよく用いられる。しかし、その意味や談話における機能的な相違については、従来の文法書や辞書では詳しく述べられていないのが現状である。

- (1) A: Thanks for all your help!
B: *That's* all right --- it was nothing really. (Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition)
- (2) A: Sorry I'm late.
B: *That's* all right. (ibid.)
- (3) A: I'm sorry I broke the vase.
B: Oh, *that's* all right. It wasn't very expensive. (Cambridge International Dictionary of English)
- (4) A: Thanks a lot for the flowers.
B: *It's* all right. (ibid.)

(1)-(4)では、thatとitは、それぞれ相手が述べた内容を指示している。すなわち、thatは、(1B)ではAがBに手助けしてもらったことを、(2B)ではAが遅れたことを、(3B)ではAが花瓶を壊したことを、そしてitは、(4B)ではAが花をもらったことを受けていると考えられる。これらの例を挙げている辞書の定義は次の通りである。

- (5) it's / that's all right:
a) used as a reply when someone thanks you
b) used to tell someone that you are not angry when they say they are sorry for something
(Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition)
- (6) It's / That's all right is an answer to someone who has just thanked you for something or just said they are sorry for something they have done. (Cambridge International Dictionary of English)

これらの定義を見ても、That's all right.とIt's all right.の意味的、機能的相違や用法の違いについては説明されていないことが分かる。

さらに辞書を調べてみると、相手の謝罪に対してはThat's all right.を用い、相手の感謝に対してはIt's all right.を用いて例示している辞書もある。

- (7) A: I'm sorry I broke the cup.
B: *That's* all right.
- (8) A: Thank you for your gift.
B: *It's* all right. (The Kenkyusha-Longman Dictionary of English Idioms)

しかし、That's all right.とIt's all right.が謝罪と感謝という意味的相違によって使い分けられているわけではないことは、次の例から明らかである。

- (9) “Oh, *that's* okay, *it's* all right”, is often a lie. A person is really saying, “Things are not okay, but I don't feel comfortable or safe expressing my real feelings to you.” (Peter Griffiths Columns, *Daily Herald July 18, 1987*)

ここでは、That's all right.とほぼ同じ意味を表すThat's okay.とIt's all right.が同一文中で同時に用いられている。したがって、謝罪と感謝という概念でこれらの構文の意味的、機能的相違をとらえることは適切であるとはいえない。

2. 既獲得情報と新獲得情報

Bolinger's (1997: x) は “the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form.”と述べ、自然言語では意味と形が一对対応を示すと指摘している。すなわち、形が違えば、伝える意味や機能に違いがある、ということになる。この言語観に立つと、That's all right.とIt's all right.に意味的、機能的相違があるとすれば、それはthatとitの違いによるものであることになり、さらにいえば、両者の指示機能の相違に還元することができると思われる。

Kamio and Thomas (1999) はAkatsuka (1985, 1999) の “newly-learned” と “already-learned” という概念を援用し、thatとitの指示機能を実証的に検証している。すなわち、itの指示対象は、相手の発話に先立って話し手がすでに獲得している情報「既獲得情報 (already-learned information)」でなければならない。これに対して、thatの指示対象にはこのような制約はなく、相手の発話によって初めて獲得した情報「新獲得情報 (newly-learned information)」であってもよいと主張している。このことを次の例で見てみよう。

- (10) [A rushes into the room excitedly]

A: Guess what! I just won the lottery!

B1: **It's* amazing!

B2: *That's* amazing!

(Kamio and Thomas (1999: 291))

(10) では、Aが興奮して部屋に走りこんできて (10A) を発話しているので、その内容は聞き手であるBにとって新しい情報、すなわち、Aの発話によってBが初めて得た新獲得情報である。したがって、(10B2) のように、Aの予期せぬ発話内容をthatで指示することは可能であるが、(10B1) のように、これをitで受けると不自然になる。これに対して、もし、Aの発話に先立ってBが「Aが宝くじに当たった」という情報をラジオニュースで聞き及んでいる状況であれば、(11B) のようにAの発話内容をitで指示することは可能である。

- (11) A: Guess what! I just won the lottery!

B: (Yes,) *it's* amazing! I heard about it on the radio, and I've invited everyone on the block to our house for a party! (ibid.)

次の例は、Aの発話内容をthat、あるいはitのいずれでも指示することができることを示している。しかし、注意しなければならないのは、両者の間にはその指示機能について際立った違いがあるということである。

- (12) A: Overnight parking on the street is prohibited in Brookline.

B1: *That's* absurd!

B2: *It's* absurd!

(ibid: 292)

Kamio and Thomas (1999) は、(12B1) はブルックラインでは夜間の路上駐車は禁止されているということをAの発話から初めて知った訪問者の発話であり、(12B2) はブルックラインの駐車規則のことを知っている住人の発話である、と指摘している。この例のように、駐車規則を知っているか、知らないか、すなわち既獲得情報であるか、新獲得情報であるか、という発話者の知識の相違が、thatとitの選択に決定的に関わっているのである。

さらに、Kamio and Thomas (1999) はthatとitの指示特性の相違が発話の場面と密接に関わり、語用論的効果に影響

響を与える場合があると指摘している。

(13) [A is attending a funeral, and approaches family members of the deceased to express his or her condolences.]

A1: *It's* tragic!

A2: **That's* tragic! (ibid: 301)

(13) では、葬儀に参列している話し手Aは故人の死をすでに知っているわけで、これを既獲得情報として遺族にお悔やみの気持ちを伝えることが求められている。したがって、(13A1) のように、itを用いて故人の死を既獲得情報として表し、お悔やみを述べることは適切である。しかし、(13A2) のように、これをthatで指示すると、故人の死をあたかも新しい情報として遺族に伝えることになってしまい、お悔やみの言葉としては語用論的に不適切である、とKamio and Thomas (1999) は指摘している。

大竹 (2009) は、Kamio and Thomas (1999) の既獲得情報と新獲得情報に基づくitとthatの分析は、先行詞が節ではなく、名詞句の場合にも有効であるとIsard (1975) の用例をあげて指摘している。

(14) a. First square 19 and then cube *it*. (it=19)

b. First square 19 and then cube *that*. (that=19²) (ibid: 20.)

(14a) のitはすでに述べた19を指示しているが、(14b) のthatは前項の計算によって新しく得られた結果である19²を指示している。

大竹 (2009) は、既獲得情報と新獲得情報に基づくitとthatの分析は日本語の「のだ」と「だ」の分析にも有効であることを実証的に検証している。次の例は、目の前で花瓶を壊してしまった場面での応答である。

(15) A: I'm sorry I broke the vase.

B1: *That's* all right.

B2: *It's* all right.

(ibid: 21-22)

(15B1) と (15B2) は相手の謝罪に対する典型的な応答である。Aが花瓶を壊したことはBの目の前で起こったことであるのでBにとって新獲得情報である。したがって、新獲得情報を表すthatを用いた(15B1)の発話は自然である。一方、既獲得情報を表すitを用いた(15B2)も容認可能である。目の前の出来事なのになぜ既獲得情報を表すitを用いた(15B2)が容認されるのか。この疑問に対して、大竹 (2009: 24) は、(15B2) のように眼前で起こったにもかかわらず、その事態をitを用いて既獲得情報であるかのように表すのは、「話し手自身が内心で十分に認知処理を済ませて下す既定的な評価であるという含みを持たせながら「いいんだよ」、「構わないんだよ」と表現するからであると考えられる。」と分析し、相手に安心感を与えて心理的な負担を軽減するために話し手が意図的に選択したものであると指摘している。

(16) A: 花瓶を壊してしまい、どうもすみません。

B1: いいですよ。

B2: いいんですよ。

(ibid: 22)

大竹 (2009) は、日本語の「の(だ)」構文の名詞化詞 (nominalizer) 「の」はitと同様の機能を持ち、話し手の知識にすでに取り込まれた既獲得情報であることを合図する、と述べている。すなわち、「の」はそれが名詞化する内容が発話に先立ってすでに話し手の内心で十分に情報処理されたものとしてとらえていることを積極的に聞き手に伝える機能を持っていると考えられる。したがって、「の(だ)」構文を用いた(16B2)は、「気にしていない」という気持ちを積極的に伝えることで、花瓶を壊してしまった聞き手の心理的負担を軽減する意図がこめられている表現であると言える。

3. 知覚領域と認識領域

大竹 (2009) は「の(だ)」構文とこれに対応する英語の構文は、知覚 (perception) と認知 (cognition) という二項対立的観点から分析することができる、と興味深い考察をおこなっている。「の(だ)」構文は、認識領域に関わる

事象と知覚領域に関わる事象のいずれの事象をも叙述することができる。このことを次に例で見てみよう。

(17) 彼女は僕の手紙に返事をくれなかった。実は、彼女はそれを読みさえしなかったのだ。

(18) 「あの音は何だろう。」「あれは蒸気機関車が走っているんです。」 (ibid.: 42)

(17) の「の(だ)」構文では、先行情報と話し手の知識に基づいて状況を認識していることを表している。(18) では、知覚した音によって発話の状況を「の(だ)」構文を用いて述べているのである。大竹(2009)は、さらに、認識と知覚という二項対立は、「の(だ)」構文では、「の」節内の「は」と「が」という助詞の選択に反映される、と興味深い考察をおこなっている。

(19) [(NP₁は) [NP₂ は / が VP の] だ] (ibid..)

認識に関わる「の(だ)」構文では、NP₂は、(17)の「彼女は」のように、話し手の知識にすでに取り込まれた既得情報を表しているため「は」が選択される。一方、知覚に関わる「の(だ)」構文では、状況の知覚と動作主の知覚が瞬間同時的に行われるため、(18)の「蒸気機関車が」のようにNP₂は新獲得情報を表す「が」が選択される。

知覚領域と認識領域に関わる事象に関わる事象を表す際、日本語では「の(だ)」構文で表すことができるのに対し、英語ではそれぞれに対応するS be NP V-ing構文(20)とIt is that節構文(21)という異なる構文を用いて表現している、と大竹(2009)は多くの興味深い事例を示しながら検証している。

(20) S be [sc NP V-ing]

(21) S be [that NP VP] (ibid: 37)

話し手は、物理的に知覚した瞬間同時的な出来事をS be NP V-ing構文(20)を用いて同定する。このことを次の例で見てみよう。

(22) A: What's that noise?

B: It's *Little Jimmy playing the piano.* (ibid: 35)

(23) A sudden movement out of the corner of Kim's eye brought a stifled scream to her lips, and her heart leaped in her chest. She raised her arms by reflex to protect herself, but then quickly lowered them. It was only *Sheba leaping onto the game table.* (ibid: 39)

(22A)の「あの音は何でしょう。」という問いに対して、(22B)は知覚した音を「ジミーがピアノを弾いているんです。」とS be NP V-ing構文を用いて同定しているのである。(23)では、suddenという形容詞が用いられていることから、この談話で展開されている事態は直接的、かつ瞬時的に同定されていることから、S be NP V-ing構文が用いられていることが分かる。もし、ここで事態を発話瞬間時に直接的に知覚しているのではない場合には、S be NP V-ing構文を用いることはできない。

(24) "People look at overweight people and say, "Oh, they're lacking in will-power" or, "She can't control herself," Powter says. "That's not true. *It's just that* they're dieting, and dieting makes you fatter and weaker."

(ibid: 40)

(24)では、話し手は人々がダイエットしている様子を直接に知覚レベルで同時瞬間的に同定しているとは考えにくい。したがって、S be NP V-ing構文を用いる代わりに、It is that節構文を用いて既獲得情報として認識レベルの同定を行っているのである。

(25) "But why after seeing Skip did you not want to help him? Especially in light of what's been uncovered about Dr. Smith." "*It's not that* I didn't want to help him, Mrs. Reardon. *It's that* I can't help him." (ibid: 44)

(26) 彼のことを助けたくなかったんじゃない。私には助けることができないんだ。 (ibid.)

大竹 (2009) によれば, (25) の斜字体部分はIt is that節構文であるが, (26) の「の(だ)」構文ときれいな対応を提示している。(25) におけるIt is that節構文は, 話し手の知識にすでに取り込まれた既得情報がthat節で伝達されている情報と同じであることを示しているのである。

4. 解釈と換言

It is that節構文の意味論的特性を明らかにするために, 大竹 (2009) は「解釈 (interpretation)」と「換言 (paraphrase)」という二項対立的概念を仮定している。It is that節構文とthat is構文 (“That is”と主節の間にコンマが介在している構文) は, いずれも先行文脈についてさらなる情報を提供するという点では類似しているが, 先行文脈で述べられている情報を同定する方法が異なっている。すなわち, that is構文が先行文脈の情報を単純に「換言」することによって説明するのに対し, It is that節構文は先行文脈の情報を話し手の論理に基づく「解釈」を示したり, 「実情」を披瀝することによって説明したりする, という意味的な相違が認められる, と主張している。

(27) Nobody has invited me to dance. {*It is that* / **That is*,} I'm not pretty enough.

(28) He worked for more than seventeen hours a day. {*That is*, / **It is that*} he slept for less than seven hours.

(ibid: 60)

(27) のIt is that節構文は, 先行文に対して説明 (解釈) を与え, (28) のthat is 構文は先行文を換言している。すなわち, (27) のIt is that節構文は, 聞き手には容易に知りたい, 話し手のみが知り得る知識に基づいて先行情報を説明しているが, (28) のthat is構文は, 聞き手にも容易に手にすることのできる常識的な共有知識に基づいて先行情報を同定している, という点で両構文は異なっている。このことは, (27)-(28) に見られるようにIt is that節構文とthat is構文は相補分布していることから確かめることができる。It is that節構文の基本的な意味について, 大竹 (2009) は次のように述べている。

(29) It is that節構文の基本的な意味は, 話し手の経験や知識をもとに, 先行する事柄の表す意味を判断し, 説明する「解釈」にあると規定することが必要である。It is that節構文がこうした基本的意味を表すのは, 先行情報が話し手の知識にすでに獲得されていることを積極的に表示する指示表現itが主題要素に選択されるからであると考えられる。話し手が先行することがらをitで指示し, 自分の先行知識にあることを明示するということは, 話し手の知識や経験に照らして, そのことがらに説明を加えるということであり, 共有知識からは容易には知ることができないような内容を伝えていると言うことができる。したがって, It is that節構文は, 話し手の知識や経験に頼らなければ容易には説明することができないようなことがらの奥底に潜む真相, 真理, 事情, 問題, 心情, 背景, 含意などを表すことになる。(ibid: 61)

It is that節構文の指示的代名詞 (referential pronoun) itは, 先行情報がすでに話し手の知識に取り込まれたものであることを示しており, その内容は聞き手には容易に知りたいものであることを示唆しているのである。また, 補文標識のthatは, 当該の情報が聞き手に容易に知ることができると文には生起しないというBolinger (1972) の分析に基づき, 大竹 (2009) はthat is構文で導かれる情報は聞き手にとって容易に知ることができると文には生起しない, と主張している。さらに, It is that節構文の意味が論ぜられるとき, 「原因」や「理由」などという意味概念が付随することが多いが, これは話し手が先行することがらを解釈することから派生的に導かれる具体的な意味の一つである, と指摘している。

大竹 (2009) は, 話し手の発話時における心的態度を表す法助動詞との共起可能性を検討することにより, It is that節構文の意味特性を明らかにしようと試みている。

(30) a. Nobody has invited me to dance. *It* {*must* / *may* / *might* / *could*} *be that* I'm not pretty enough.

b. Nobody has invited me to dance. *It* {**will* / **would* / **can* / **should* / **ought to*} *be that* I'm not pretty enough. (ibid: 63)

(30a) のIt is that節構文が容認可能であることから, 先行情報を同定するthat節の情報が直接的, あるいは間接的な根拠に基づく推論 (= *must*) や現実に基づく論理的可能性 (= *may* / *might* / *could*) である場合は, It is that節構文と共起することができる。一方, (30b) のIt is that節構文が容認不可能であることから, 根拠のない単純な推測 (= *will* / *would*), 理論的可能性 (= *can*), 話し手が疑念を挟み得る論理的必然性 (= *should* / *ought*) はIt is that節構文と共起することはできない。すなわち, It is that節構文は, 話し手の論理や根拠に基づく推論を経なければ

聞き手には容易に知りたい命題内容をthat節内で表現しているのである。

5. It is that節構文の語用論

It is that節構文が用いられている談話をよく見ると、この構文がいくつかの興味深い語用論的機能を発揮していることが分かる。大竹（2009: 67）によれば、It is that節構文は先行する発話内容に関する聞き手の解釈を意識しながら、事の真相や実情を明らかにし、結果として、誤解を回避したり、言い訳や謝罪を行ったりする際に用いられる。これは、話し手が自らの知識にすでに取り込んでいる情報に基づいて先行情報を解釈することにより、聞き手には容易に知りたい事情や状況を説明することができる、という機能をこの構文が有しているためである。

- (31) Don't misunderstand. Little, 37, believes in nuclear energy. He's the son of a civil engineer and saw his future in seventh grade when St. Louis-based energy company Amern (AEE) announced it would build a reactor in Callaway County. *It's just that* Little didn't see the 80s bust in nuclear energy coming. (ibid)
- (32) Don't get me wrong: I'm not interested in dissing Kitty here. *It's just that* I've long been fascinated by Japan's cult of cuteness --- it's rather like an obsession. (ibid.)
- (33) Renee Radick: Well, don't get me wrong, Ally...
 Ally McBeal: Why does everyone say that to me? Do I get everything wrong?
 Renee Radick: No, *it's just that* what I am about to say may sound like insult, so I want to buffer it.
 Ally McBeal: Oh, okay. (ibid: 68)

(31) では、It is that節構文に先だって *Don't misunderstand.* という表現が現れており、聞き手が誤解しないように注意を促した上で、It is that節構文を用いて相手の誤解を解く事情を説明している。(32)-(33) は、冒頭に *don't get me wrong* が現れていることから、誤解が問題となっている文脈である。ここでは、相手の誤解を解くための事情を説明するためにIt is that節構文が効果的に用いられていることが分かる。

- (34) I must apologize for my behavior in the office, *it's just that* your appearance was a bit of a shock to me. (ibid: 69)

It is that節構文は聞き手には知りたい事情や真相を話し手が解釈して説明するという機能を持つことから、弁解や言い訳を伝える場面でよく用いられる。(34) では、*I must apologize* という謝罪の後に、It is that節構文が用いられ、弁解を伝えるという機能を発揮している。

大竹（2009: 70）は、It is that節構文は単なる思いつきではなく、話し手が先行情報を発話に先立って話し手の内心で十分に認識処理した上で解釈を下したものである旨を伝えるため、相手を納得させ、安心させる談話機能が派生される、と指摘している。

- (35) "Nothing's any different than it was a minute ago." "I know that," he assured me. "*It's just that* this time I've lowered my standards." (ibid: 71)
- (36) "What's the matter?" I asked. "Don't I dance well enough?" "Oh, yes," he assured me. "*It's just that* --- well, I thought you said, "May I have your stamps, please!" (ibid.)

(35)-(36) では、*he assured me* という表現によって相手の不安を解消した上で、心配する相手を安心させるため、当該の事情を直接言明するのではなく、It is that節構文を用いて話し手の内心で十分に認識処理をした旨を示唆し、that節の内容を既定のこととして伝えているのである。

さらに、この構文を用いて事の真相や実情を述べる場合、聞き手の予想される誤解や推測をあらかじめ否定することがあるため、It is that節構文の直前にはIt is not that節構文が現れ、聞き手の解釈を否定しておく事例が多く観察される、と大竹（2009）は指摘している。

- (37) "My confidence is back, I'm believing in myself. I mean *it's not that* I've lost confidence, *it's just that* I was having some tough practices," she added. (ibid: 72)
- (38) Europe now accounts for more than 30% of Broacvision's revenues, up from around 20% a year ago. *It's not that* spending on Broadvision software is booming in Europe, Chen said. *It's just that* it hasn't totally collapsed like in

the U.S.

(ibid.)

It is that節構文は聞き手には容易に知りたい情報を伝達するため、話し手に対して横柄で押しつけがましいというような否定的な感情を聞き手に抱かせてしまう恐れがある。この点について、大竹 (2009) はLee (1991) の分析を受け入れ、副詞justは話し手の主張を和らげ、対人関係を良好に保つ緩衝機能があるため、It is that節構文に多用される、と述べている。It is that節構文は、相手の誤解を予測し、それを否定して新たな解釈を提示する機能をもつため、相手の解釈の誤りや知識の欠如を問題にする可能性がついて回ることになる。大竹 (2009: 83) によれば、この構文でjustが多用される理由は、聞き手の予想される誤解を解き、自らの考えを既定のものとして伝える際、聞き手に自らの解釈を押しつけているとか、聞き手の無知をあげつらっているという含意を積極的に回避しようとする話し手の気持ちの表れである、と指摘されている。

- (39) “As soon as possible,” Laurie encouraged, “I don’t mean to be a bother. *It’s just that* I’m more convinced than ever that a contaminant of some sort is involved. If there is, I want to find it.” “If it’s there, we’ll find it. Just give us a chance, for Chrissake.” “Thanks,” Laurie said. “I’ll try to be patient. *It’s just that--*” “I know, I know,” John interrupted. “I get the picture already. Please!” (ibid: 82)

6. It is that節構文と「の(だ)」構文

大竹 (2009: 48-49) はIt is that節構文と「の(だ)」構文には、談話の冒頭で用いられることはないという共通点がある、と指摘している。次の例を見てみよう。

- (40) a. Oh! I have no money.
 b. Oh! **It is that* I have no money. (ibid: 49)
- (41) a. Hi! I’m back.
 b. Hi! **It’s that* I’m back. (ibid.)
- (42) a. あれ、お金がない。
 b. あれ、*お金がないんだ。 (ibid.)
- (43) a. やあ、帰ったよ。
 b. やあ、*帰ったんだよ。 (ibid.)

(40b), (41b), (42b), (43b) を見ると、It is that節構文も「の(だ)」構文も談話の冒頭に用いることはできないことがあきらかである。これは、両構文とも先行情報を話し手の知識と関連づけて解釈するという基本的な意味を持つからである。談話冒頭では、このような先行情報が与えられないので、両構文とも不適格となるのである。しかしながら、興味深いことに、「の(だ)」構文は言語的の先行詞、および非言語的の先行詞のいずれも許されるのに対し、It is that節構文は必ず明示的な言語的の先行詞を必要とする、と大竹 (2009) は主張している。

- (44) [土筆が顔を出しているのを見て]
 a. 春になったなあ。 (ibid.)
 b. 春になったんだなあ。 (ibid.)
 c. Spring has come. (ibid.)
 d. **It is that* spring has come. (ibid.)
- (45) [話し手が脚をかきながら]
 a. 蚊に刺されちゃった。 (ibid.)
 b. 蚊に刺されちゃったんです。 (ibid.)
 c. I was bitten by a mosquito. (ibid.)
 d. **It is that* I was bitten by a mosquito. (ibid.)

(44b), (45b) では、非言語的の先行詞 ([土筆が顔を出しているのを見て], [話し手が脚をかきながら]) だけでも「の(だ)」構文を用いることができるが、明示的な言語的の先行詞がない (44d), (45d) では、It is that節構文を用い

ることはいできない。

大竹 (2009: 148) は、英語の換言表現である “that is” と類似の換言表現である日本語の「すなわち」は「の(だ)」構文とは共起しないという現象は、that is構文が補文標識thatの表示を認可しないという文法現象に働くメカニズム (4 節 (27)–(29) 参照) によって説明できる、という興味深い分析を提示している。

- (46) a. 国会は二院からなる。すなわち、衆議院と参議院である。 (ibid: 148)
 b. 国会は二院からなる。？すなわち、衆議院と参議院なのである。 (ibid.)
 (47) a. 悲嘆は、私たち人間は記憶の存在であり、記憶の漏出は、すなわち存在理由の死滅だとかたってやまない。 (ibid.)
 b. 悲嘆は、私たち人間は記憶の存在であり、記憶の漏出は、？すなわち存在理由の死滅なのだとかたってやまない。 (ibid.)

(46b), および (47b) の容認可能性が低いことから、「の(だ)」構文は、It is that節構文と同様、先行文脈の単なる言い換えに過ぎない情報を伝達することはできないことが分かる。このことは、(48), (49) のように、「つまり」、「結局」、「要するに」などの論理関係や先行情報を要約する副詞語句や「事実」、「実際」などの実情を表す副詞表現は、話し手の知識にすでに取り込まれた情報を同定する「の(だ)」構文に生じることが可能であるという事実によってさらに確認することができる。

- (48) その商品はよく売れている。[結局 / つまり] は消費者のニーズに合っているのだ。 (ibid: 149)
 (49) 彼女は僕の手紙に返事をくれなかった。[実際 / 実] は彼女はそれを読みさえしなかったのだ。 (ibid)

「の(だ)」構文では、3 節で見たように、主節の主題要素は文の表面に明示されないことがしばしば見られるが、同様の現象が英語のIt is that節構文にも確認できる、と大竹 (2009) は指摘している。

- (50) [(NP₁は) [NP₂ {は / が} VP の] だ] (= (19)) (ibid.: 42)
 (51) She was in her private office, meeting with tow associates, when she was told her doctor had been waiting some time to see her. *It wasn't exactly that* she'd forgotten he was due; *just that* she'd been so determined to carry on business as usual. (ibid: 143-144)
 (52) Still wiping lipstick off my cheek on the train home, I marveled at the strength of my reaction. *It wasn't that I* construed the gesture as sexual. *Rather that* I felt outraged by the assumption that any kind of intimacy was appropriate after so short an acquaintance. (ibid: 144)

(51), および (52) では、直前に*It wasn't (exactly) that*が現れており、“It is”の形式を繰り返すのを避けるために*just that, rather that*で文を始めていると考えられる。興味深いのは、直前に“It is that”の形式が現れていない場合でも“*It is*”の形式が省略されている例が存在していることである。

- (53) “Did you ever try Prozac?” Edward asked. Kim turned to look at Edward. “Never!” she said. “Why would I take Prozac?” “*Just that* you mentioned you had both anxiety and shyness,” Edward said. “Prozac could have helped both.” (ibid: 145)
 (54) Pulling the phone over to the edge of the table, Sterling wanted to finish work for the day before he indulged in dinner. *Not that* he found work a burden. Quite the contrary, Sterling loved his current employ, especially considering that he didn't have to work at all. (ibid: 146)

大竹 (2009) は主語の表示が義務的である英語において、主節部が省略されるにはしるべき理由がなければならぬと論じ、これにはIt is that節構文の機能と話し手の語用論的要請が関わっていると指摘している。It is that節構文は話し手の既獲得情報をitで合図し、聞き手には容易に知りたい内容を補文で提示する構文である。このことから、5 節で見たように、It is that節構文は聞き手の無知をあげつらうような含意を伴うことがある。このような含意を回避する手段の一つとして、It is that節構文はjustと共起することが多いことも確認した。大竹 (2009: 147) は、これに加え、聞き手との情報格差や知識の優劣を表面化したくないという話し手の意図が強く働けば、話し手の知識

にすでに取り込まれた既得情報を表すitを含む主節部“*It is*”さえも文の表面に明示されなくなる、と分析している。すなわち、(53)-(54)の例は、話し手の知識の優越を表面化しないという語用論的要請に基づく省略と考えられるわけである。

*本研究は、日本学術振興会平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号No.21520503「談話における分裂文の総合的研究－関連性理論、機能文法、認知言語学による考察」の援助を受けて成された研究の一部である。

参考文献

- Atlas, J. D. and Levinson, S. C. (1981) “*It*-clefts, informativeness, and logical form: radical pragmatics (Revised Standard Version).” In P. Cole (ed.) (1981) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press. 1-61.
- Bolinger, Dwight (1972) *That’s That*, Mouton, The Hague.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- Carlson, Lauri (1983) *Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Collins, P. C. (1991) *Clefts and Pseudo-Clefts Constructions in English*. London: Routledge.
- Declerck, R. (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Halliday, M.A.K (1967) “Notes on transitivity and theme in English,” *Journal of Linguistic* 3: 177-274.
- Halvorsen, P-K. (1978) *The syntax and semantics of cleft constructions*. *Texas Linguistic Forum, II*. Department of Linguistics, University of Texas, Austin.
- Horn, L. (1981) “A pragmatic approach to certain ambiguities.” *Linguistics & Philosophy* 4: 321-358.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas (1999) “Some Referential Properties of English *It* and *That*,” *Functions and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, ed. by Akio Kamio and Ken-ichi Takami, 289-315, John Benjamins, Amsterdam.
- 加藤雅啓 (1998) 「分裂文とwh分裂文の排他性含意」 *International Journal of Pragmatics* 8: 33-48.
- 加藤雅啓 (2002) 「分裂文と疑似分裂文の総記的含意」『英語青年』2002年7月号, 東京: 研究社出版 236-237.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味 意味論序説』東京: 大修館書店
- Otake, Yoshio (2002) “Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction,” *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 143-157.
- 大竹芳夫 (2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』東京: くろしお出版
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman.
- Valludivi, E. (1992) *The Informational Component*. Outstanding dissertations in linguistics. New York: Garland Publishing, Inc.

It is that-construction and Japanese *No da*-construction

Masahiro KATO**

ABSTRACT

This article deals with the semantic and functional properties of English *It is that*-construction and Japanese *No da*-construction in discourse. The main points argued here are (i) that reviewing Otake (2009), and his claim that information in the speaker's store of knowledge plays a crucial role in the interpretation of the *It is that*-construction; (ii) that his claim that the *no da*-construction and its English counterparts can be analyzed in terms of the dichotomy of *perception* and *cognition* can be tenable; (iii) that the dichotomy, *interpretation* and *paraphrase*, sheds light on the semantic properties of the *it is that*-construction; and (iv) that his analyses regarding pragmatics of the *It is that*-Construction are very insightful.